霧の街の剣鬼

青二葵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神崎・Ｈ・アリア、遠山　キンジがチームであるバスカービルと対をなす組織として結成されたライヘンバッハ。

そこに所属するジャック・ザ・リッパーことジルに救われた少女ーー岡田　以織（いおり）。

彼女は迷いながらもライヘンバッハと共に裏の仕事に手を染めて自分の行く道を探している。

これは剣の鬼に身を落とす少女の物語。

ーー救いなんてありません。

ーー活きるか死ぬか、それだけの話です。

※本作品は緋弾に迫りしは緋色のメスのスピンオフ作品です。

オリキャラが多いため、原作の登場人物は少なめなので注意してください。

目次

迷走 1
秘密 11

迷走

イギリスのロンドン。
今となっては日本人の私でも多少は生活に慣れてきました。
スターゲイジーパイは慣れませんが……
というかイギリスの料理は正直慣れそうになさそうです。
フィッシュアンドチップスなんてゲテモノでした。
ポットヌードルも日本のインスタントに比べるとまあ……
そもそも間食をあまりしないんですが。
岡田　以織です。
既にソフィーさんには知られてるというか、私の家族には既に周知の事ですが、人斬り岡田　以蔵の子孫。
それが私。
今はジェームズ・モランが運営する民間警備会社（PMC）に所属するフリーの武偵だ。
就職したお陰で武器関連の免許や武偵免許は剥奪されない。
代わりに就職した届け出をロンドン武偵局に出してどこに所属しているかを明確にしなければならなかったが、すんなりと審査は通った。
武偵高を卒業していないために仕事の際には先輩とバディで行動せよ等いくつか制約もあったが大した問題ではない。
問題はーー
「……」
その先輩がミアだと言うこと。
耳が聞こえないミアが言葉を発する事はない。
筆談や文字を表示する端末でやり取りしている。
ミアは極度の難聴で聞こえなくても読唇術でこちらの言ってることが分かるらしい。
それと、簡単な会話ぐらいなら私も英語でやりとりすることが出来るようになった。

日常的に違う言語に触れていれば、ニュアンスぐらいは分かる。
キアさんが教えてくれるのもあるが、ともかく日常的には問題がなくなってきた。
ミアもジェームズさんの民間警備会社のフリーエージェント的な立ち位置らしい。
そういう風にソフィーさんが根回しをしたのだろう。
お互いに黒いスーツに身を包んで、胸には武偵を表すバッジと民間警備会社のバッジを付けている。
ミアの場合は服に着られてる感じがして、少しばかり似合わない。
1、2歩先を歩く私より小さい彼女が先輩だとは周りはあまり思わないだろう。
私とミアの仕事はキアさんの護衛。
まあ、専属のボディーガードという話だったので分かっていた流れではあるが……そもそも私自身が受けたのだから当然でもある。
契約は3ヶ月。
その間で仕事に問題がなければ、引き続き更新する流れだそうだ。
契約中に別の依頼が発生する可能性もあるが、別に問題ないとしてキアさんはそれを了承した上で契約した。
彼女を送迎するチャールズも、オペラの関係者達も喜んでいた。
今まで襲われなかったのが不思議なくらいだと。
オペラの歌手で見目麗しいキアさん。
目が見えないので、まあ……狙われる理由は多いだろう。
確かに心配する要素は多い。
しかし、気まずい。
私は特に何もしてないはずなのにどうもミアは私に対して冷ややかだ。
男を見る時の目とは違うのだが、それでも底冷えする感じだ。
まあ……ロンドンの死神などと呼ばれる犯罪者なのだから私とは色んな意味で格が違う。
通行人もその小柄な少女の異様な雰囲気に思わず避けたり、通りすぎた後に振り返ったりしている。

段々と別の意味で居心地が悪くなってくる。
姉上の話ではロマ族という移動民族に似てるとの話だが、正確なことは分からないらしい。
一応姉上に聞いたロマ族としての特徴としてはインド人よりも肌の色が薄いことらしい。
あと美人が多いとか。
あくまでもロマ族の特徴であって、キアさん達は微妙に違うとも言っていた。
確かに肌は浅黒く見えるが、褐色という程ではない。
パッチリとした二重にキアさんに似て肩まで伸びた天然パーマな黒と金が混じった髪。
年齢的にはどうなのかよく分からないが、キアさんは働いてるし……２０前半くらいだとは思うのだが、小柄なせいでそうは見えない。
身長的には１５０くらいだろう。
いや、もしかしたら私がデカイだけかもしれない。
などと現実逃避気味に観察していると……
「……」
ミアは唐突に立ち止まって私を見て目を細めた。
『視線が気持ち悪い』
そして端末に文字を打ち込んで見せてくる。
き、気持ち悪い……
聞こえない分、気配には敏感だとは思っていましたが。
気持ち悪いって……
「そんなに嘗め回すように見てませんが」
『男みたいな視線』
……アレ？
私、実は男判定されてます？
「そんなつもりはないんですが、不快に思わせたなら、すみません」
私は素直に謝罪する。
『姉さんを誘惑しないで』

誘惑してるつもりは欠片もない。
むしろキアさんの方から誘惑してると感じる。
お風呂の補助を頼まれたり、着替えの補助を頼まれたり……
今まで1人でやってきたことが楽になったと喜んではいたが……
どうも別の意図があるように思えてならない。
たまに着替えの時に私の手を持ってブラジャーを外すように言いながらも何故か胸の方に誘導してくる。
怪しい上に妖しい。
そして、ミア妹さんには殺されそうな視線を向けられる。
勘弁して欲しいです。
妹さんに頼めばよろしいのではと提案したが、「誘っても今まで避けてきたのを気にしてか、素直に来てくれないの」と言っていた。
確かに妙によそよそしい雰囲気はある。
なので納得はしていますが、それでも上手くやられた感じがするのは気のせいでしょうか……
そんな時に電話が来た。
支給された携帯に出ると、上司であるモランさんの声が聞こえる。
「はい、岡田です」
『イオリ、依頼だ』
「次は猫ですか？　白鳥ですか？」
民間警備会社と言ってもやるのは雑用だったりもする。
正確には武偵事務所ではあるのだが、何故かモランさんの経営するところは民間警備会社扱いである。
環境への適応ということでダラム周辺で請け負った依頼は大体はそんな猫探しや家の警備といった地味な仕事ばかり。
別に報酬がどうとは私は求めませんけど。
表の仕事としてはそんなものだ。
『わざわざロンドンまで行って猫探しなんぞ頼まん。探すのはネズミの方だ』
「そうですか」
ネズミというのはよくある隠語。

何かしらの依頼のターゲット。
最近は裏の仕事も少しずつ頼まれるようにはなりました。
何故かそれが妙に馴染むというか、しっくりきてるのが何とも言えない。
ご先祖を思えば納得はすることではある。
「どんなネズミですか？　病原？　それともドブ？」
『ドブの方だ』
ということは麻薬の底辺の売人とかそんなところでしょう。
「依頼人は？」
『武偵局と言っておこう。正式な裏の仕事だ』
裏なのに正式とはいかに。
「えっと……生死は？」
『問わない。掃除を望まれてる』
「そうですか。分かりました。場所は？」
『イーストエンド、ホワイトチャペル。今夜の深夜２時。黒いバン……ナンバーはＬＵ　００　ＡＩＭ』
「現場に現れた全員でいいんですね？」
『そうだ。死体は掃除屋に任せる。近場に待機させる。終わったら連絡しろ』
それだけ言ってモランさんは通話を切った。
私が言うのもなんですが無愛想な男です。
ミアが私を見上げて聞いてくる。
『仕事？』
「そうです。今夜２時のイーストエンドのホワイトチャペルで掃除だそうです」
『殺(や)れるの？』
「多分……」
『多分じゃ困る』
バッサリ言われて、ミアはきつめの視線から呆れた顔をする。
私は別に、人を斬るのに抵抗がそれ程ない。
復讐をして、ミアに襲われて……人を殺すことに抵抗はないはず。

だけど……違和感が未だに残る。
何が違う？
今まで人を殺したことがなかったのに……どうしてこんなにも人を斬るのに抵抗がないのかが分からない。
人を、復讐で斬ったあの日……自覚した瞬間はどうしようもない気持ち悪さがあった。
でもそれだけだった。
それが終わればいつもと変わらない日常。
ただ1つあれから考えるのは、姉上のために力になりたいとは思う。
だって姉上のおかげで曇っていた目が開かれた。
安らぎを得た。
そして天誅を受けるべき人間がどこにでもいる、そう気付けたのだ。
なのに何を悩んでるのかが分からない。
人を斬るのに抵抗はない、姉上に死んで欲しくない。
武偵高にいた時に比べて空虚ではない……そのはずなのに。
なぜ……
キアさんを自宅へ送り届け、私達は仕事。
深夜1時ーーイーストエンドのホワイトチャペル。
ダーウォードストリートという路地のような狭い道。
街灯もなく暗い道だ。
近くにスポーツセンターと工事現場があり、深夜に人が来なさそうなところではある。
細部の場所を改めて指示された地点がここだ。
そんな中でミアは暗闇なのに見えているかのように先を歩く。
姉上の話だとかなり目がいいらしい。
聴覚の機能を補うために視覚が発達してるとのことだ。
私はようやく暗闇に目が慣れたくらいなのにミアは注意深く辺りを見てる。
それから工事現場の塀を越え、私達は待ち伏せをする。

『上で見張ってる』
それだけ文字で伝えて軽々と工事の資材が積み上げられた場所に登り上がり、ミアは陣取った。
耳が聞こえないので目で探すしかないからだろう。
私は物陰でひっそりと刀の鯉口を上げ、どうするかを考える。
少しだけ出した刀身で自身の顔を見る。
私は何を悩んでるのか、何が足りないのかその繰り返し。
自問自答を重ねて、答えを見つけたと思えば何かが足りないと違和感を覚える。
多分、相談しても誰も答えてはくれない。
というより誰も答えられないだろう。
私自身が答えを見つけなければならない。
『黒いバンがきた。ナンバーも合ってる』
ミアが見つけたらしくメールが送られてくる。
実際に車両が近付いてくる音がする。
資材の影から覗けば3人、車両から降りて工事現場の近くに停めた。
取引相手でもいるのかと思ったが既に終わったあとのようだ。
何やら黒いバンの荷台には怪しげなケースが４つ。
中身はどうでもいいのでまずは始末。
『２０秒後に殺す。そっちに合わせる』
ミアも同じように考えていたのか連絡がくる。
１０秒……息を整えて静かに黒いバンの影になるよう運転席側から回り込む。
５秒……静かに突きの構えに入る。
……。
……０。
バンの荷台部分の脇にもたれ掛かる1人の頸(くび)を貫く。
同時にミアが助手席側にいた1人の頸をナイフで刺す。
どちらも声を上げる前に死んだ。
私は体が前に倒れる寸前で死体の襟首を掴んで引き寄せ、ゆっくり

下ろす。
もう1人はバンの中で何か作業をやっていたのか気付いていない。
私の近くにミアが来て、
『あなたが殺(や)って』
試すような感じの目で文字を見せてきた。
さっき斬った感じでは特に違和感もない。
私は静かに頷く。
刀の血をタオルで軽く拭き取りそのまま、静かに荷台へ。
まだ作業中で気付いていない。
こちらに背を向けたまま、無防備な背中を晒している。
息を吐き、突きの構えに入る。
こちらに振り返ろうとする瞬間、地面を蹴り、そのまま頸を貫く。
だけど浅い……鎖骨辺りに刃が入り込んでいた。
痛みで貫かれた青年は息を荒くしている。
青年……いや、よく見ればまだ幼さが残る少年に見える。
「イヤだ……死にたくない」
涙を流して懇願する少年。
だが、目が中毒者のそれだ。もう引き返せないだろう。
……。
まだ少年。
私のようにやり直せる機会は、きっと……
そう思ってしまう。
どうしても私の姿を少し重ねてしまう。
空虚だった私を。
そのまま刀から手を離す。
変に抜いても出血するだけだから。
「まだ引き返せます。足を洗うことです」
それだけ英語で言って、私は車両から出る。
多少は痛い目をみたんです。
死に目に遭えば更生するでしょう。
2人殺して1人を生かす。

我ながらバカだと思います。
少年に振り返ったその瞬間、いつの間にか銃が握られている。
マズイ……
そう思った瞬間には引き金が引かれ、銃弾が放たれる。
痛みと共に放たれる閃光は真っ直ぐこっちに向かっている。
間に合わない。
間違いなく。
そして、黒い影が私の前に立つ。
それから銃弾が弾かれる。
「い、生きてる」
思わず棒立ちだったが、生きてる。
影の人物を見ると、ミアがナイフを持って髪を振り払って立っている。
そのままナイフを少年の頭に向けて投げつける。
ナイフは吸い込まれるように少年の頭に。
そして絶命。
それを確認したミアは、
「……ハァ」
と息を吐いた。
そして向けられるのは冷ややかな目。
呆れが混じっているそれは、私も思わずやらかしたという気分になる。
『甘い』
と簡潔に端末の文字を見せた。
引き続き文字を打ち込み、
『2人殺して、1人救っても自己満足。私もあんたも殺した方が救いになる。そこの3人と同じ、引き返せない』
私が内心思っていたことを少し当てられて思わず胸を押さえる。
『お姉ちゃんを守る気がないなら帰って。信用できない』
それだけ見せてミアはナイフを頭から引き抜き、闇夜に消える。
確かに中途半端ですね……未だに。

殺した方が救いになる、か。
バンに再び乗り込み少年に刺さった刀の柄を軽く握る。
血を流れ、荷台が水たまりになって染まる。
少年を見下ろしながら私は刀を引き抜く。
……哀れですね。
それは同時に私の自虐でもある。
軽く刀を拭き取り、鞘に納める。
殺して活かす。
殺した方が救いになる。
ミアの言葉が耳に、脳に残る。
ーーいっそ、姉上も殺した方が救いになるのでは……
……。
私は何を考えてるんですか。
恩人を、家族を殺すなんて。
吐き気がしてくる。
どうしようもなく。
私は気分の悪いままバンを去る。
私は岡田　以織。
これは異国の島国で剣の鬼になる私の物語。

秘密

私は唐突にソフィーさんに呼ばれ、彼女の屋敷に。
その途中でウィリアムさんに出会う。
「ああ、イオリ。ソフィーさんに呼ばれたのかい？」
「ええ、まあ……」
「気を付けて下さい。最近はハイドも気が立っていてね」
「前から思ってましたが、いつも言ってるハイドさんはどこですか？」
私の言葉にウィリアムは首を振る。
「僕の中に、知ってるだろう？　ジキルとハイド。いつの間にか現れてしまうから気をつけてくれ」
ジキルとハイドーー多重人格の犯罪者の話だったか。
そんな気はしてた。
彼は隠そうともしなかったから。
「ジル君には感謝してるよ。僕にも居場所をくれたからね」
「そうですか。……私と一緒だ」
姉上はきっと行き場を失くして人を救ってる。
そう私は感じた。
きっとみんな隠しているだけでここにいる人はロクでもない連中で、どうしようもない連中だ。
直感で感じている。
だけど――救いがあってもいいとそう思う。
「それでは」
「ああ、またねイオリ」
ウィリアムさんと別れを告げて、そのままソフィーさんの書斎へ。
ノックをして部屋へ。
「お呼びと聞いて」
「ええ、単刀直入に言いましょう。今度、香港に行って貰うわ」
机でチェスを動かしながら淡々と告げる。
その言葉に私は疑問を抱く。

香港、どうしてこの時期に？
「少しばかり動いて貰いたいの。汚れ仕事だけど」
「いつものことですね」
「今度キアも香港でオペラをするでしょう。ミアも一緒」
「そんな予定は聞いてませんが」
「スケジュールから計算しただけよ」
出ましたね、ソフィーさんの未来予知とも言える『計算』。
私は彼女がその頭脳と舌先一つで物事の流れを変えること知っている。
「それと、キアの秘密を知っておきなさい」
「秘密、ですか？」
「妹が歪んでいるのに姉が正常だと思う？　それは大それた見当違い、計算違い。誤答ね」
……そんなはずは、と思った。
ここに来て3ヵ月は経とうとしているがキアさんはそんな素振りは一つもない。
オペラのスタッフにも慕われており、運転手のチャールズさんにも愛想よくしている。
どう見てもおっとり系のお姉さんだが――
「秘密なら誰でもあるのでは？」
至極当然の私の返答に、ソフィーさんはチェスの城（ルーク）をカツンと机に置く。
それから何もかも見通していながら、覇気のない目を向ける。
「秘密を知ることで親密になれる。何より彼女はあなたを気に入ってる。秘密を知って欲しいと思いつつも、それが恐ろしいのだと心で計算してる」
今よりも親密……？
ただでさえ風呂を一緒に入ろうとか、ベッドにミアさん含めて一緒に寝ようとか、着替えをやたら私にさせたがる現状以上に親密になれと？
これ以上親密になったら私の貞操が一刀両断されそうなのだが。

「死にはしないわ。痛みは伴うかもしれないけど。どちらにせよ知ってしまう。いや、彼女の計算の内にハマってしまうと言った方がいいでしょう」
何だか不穏な話が進んでいる気がする。
しかし……計算の内にハマる。
確かにミアさんは何か意図して私にアピールじみた行動をしてる気はする。
私に”そっち”の気はない、はずだ……
「香港に行く前に仕事の内容は話しておくわ。今日はまだ、その時ではないの……明日は長い夜になるから」
ソフィーは別れ際にそれだけ告げた。

ということがあり、後日に夕方のロンドンへと戻ってきた。
ミアさんも1人でキアさんを護衛してるだろう。
護衛と言うよりもただの家族団欒(だんらん)でしょうが。
ソフィーさんに言われたことが引っ掛かる。
確かに2人の過去の事を考えれば何かしらの人格破綻があっても仕方ない。
それ程までに2人の経験した傷跡は凄絶だ。
しかし、ミアさんはともかくキアさんはどう見てもは真っ当に働き普通に生活してる。
キアさんの居住場所であるアパートへと上がる。
護衛の期間中はここが私の住まい。
部屋も空きがあるので自由に使わせて貰っている。
流石に姉の隣は譲れないのか、ミアさんのもう1つ隣でキアさんから2つ離れてる部屋だが。
玄関を開ければ小さいリビングとキッチンが一緒になった場所でキアさんはいた。
「あら？　イオリさん？」
「はい、ソフィーさんに呼ばれた件は終わりました」
「そう、それは良かったわ。ミアは買い出しに行って貰ってるの。い

つも申し訳ないのだけれど――」
「分かっています。お風呂とＣＤのセットですね」
キアさんの日常のサポートも契約内容なので、いつもの内容を確認する。
彼女はいつも寝る前にＣＤを――音楽を聴きながら寝るのだ。
「今日は一番下の棚、右から４番目。モーツァルトの『魔笛』をお願いします」
「分かりました」
上の階へと昇り、電気を点けてキアさんの部屋へ。
それから主にオペラのＣＤを収納してる棚へと目を向け一番下の棚に手を掛ける。
ズラリと並ぶＣＤ。
これの配置をキアさんは覚えてるのだからスゴイと思う。
右から４番目、確かにパッケージは英語で『魔笛』とある。
中身を空け、ＣＤのカセットに入れようとしたところで違和感を覚える。
ＣＤのディスクには『魔笛』らしい表示がない。
――『Ｍｙ（私の）Ｆａｖｏｒｉｔｅ（お気に入り）４』と表示されてる。
お気に入りの曲を編集したものだろうかと思い、特に気にせずそのまま入れる。
リクエストの曲でないとキアさんは機嫌が少し悪くなるんですよね。
オペラをこの家にいる間に何度も聞かされているので多少なりとも、何の曲かは判別できる。
そのまま静かに再生する。
特に最初は何の音もない。
だけど、１０秒経っても序奏すらないのはおかしい。
そう思ったが――
カツン、カツンと何かの靴音。
中身が違うのでは、と思い停止しようとした。
『やめて……お願い……』

か細い女性の声。
それが聞こえたと思った瞬間、肉を抉る音。
『あ”ああああッ！　いたいッ！　あ、フッ……ぅぅぅぅぅぅ!?』
何かを締め付けて、折れる音。
『腕、折れッ……が、あぁぁぁぁぁぁ！』
……明らかにこれがソフィーさんが言ってたキアさんの秘密だと心の中で感じている。
だけど、同時に寒気を感じる。
これはすこぶるマズイ。
それに心のどこかで信じてはいなかった。
キアさんの振る舞いは一般人のそれだ。
盲目にも関わらず、気高く美しい精神の人だと……思っていた。
「知ってしまったのね」
慌ててCDプレイヤーの停止ボタンを押して振り返る。
扉の前ではキアさんが杖を持っていつもと変わらない表情をしている。
「まあ、私が誘導したのですけれど……そろそろイオリさんにも私の秘密を知って欲しくて。でも、同時に引かれるとも思ってました」
キアさんは電気を消し、ゆっくりと扉を閉め、カチャリと何故か鍵を閉める。
言葉が出てこない。
何かを握られているような感覚がする。
「私も歪んでるの。本当は」
「どうして……今なんですか？」
このタイミングで何故、それを告白したのか分からない。
「3ヵ月の契約ですから」
そう言えばそうだった。
まずは3ヵ月の契約。
その後の働き次第での更新との話だったが……キアさんはこの節目に自分の秘密を知った上で私に選んで貰おうと。
確かにとんでもない秘密ではあった。

だが、妹であるミアさんが『ロンドンの死神』と言われる犯罪者であるので、大して驚きが無いのが我ながら悲しくもある。
「どう、思いました？」
不安そうな顔でキアさんは尋ねる。
こんな秘密は確かに人には言えない上に、ドン引きされるだろう。
正直私もコメントに困る。
「えっと……そうですね。よく分からないというのが私の回答です。だけれどキアさんがそうなったのも理由があるのではと」
「そうですわね。恥ずかしい話なのだけれど――昔の奴隷生活での所為（せい）ではあるの」
確かにキアさんのミアさんには凄惨な過去がある。
そこで何かしら歪んでてもおかしくはない。
「妹の声がね、耳から離れないの」
キアさんは徐々に私に距離を詰めてくる。
それからもたれ掛かるように私の胸に。
「妹が滅茶苦茶にされている光景が、声が……どうしても離れなくて。大切にしてる人の声に、どうしても興奮してしまって――」
徐々に彼女の歪みが私に露わになっていく。
「目を閉ざしてからも私の耳は……命の歌声を、求めてしまう。ダメだと分かっていても……人が命を燃やして発する声がどうしても聞きたくて、聴きたくて――」
それから自分の不安をさらけ出すようにキアさんは私を見上げる。
「こんな私でも受け入れて下さる？」
彼女の気持ちを受けきれるかどうか。
私はある意味試されている。
きっと、彼女は愛に飢えているんだ。
その歪んだ愛情を妹に向ける訳にはいかない。
だからこそ私なのだろう……その言葉で要領を得なかったソフィーさんの助言が頭に響く。
――痛みを伴う。
その言葉で彼女を受け入れた後の展開が少々予想できてしまう。

肯定的に答えてしまえば、最後――
私は、恐怖で固まる。
彼女の愛を受け止められるかどうかを。
「やっぱり、ダメですわよね……ゴメンなさい。急な話で」
諦めたような表情のキアさん。
その言葉に私はふぅ、と息を吐く。
そんな悲しげな表情をされると、捨て置けない。応えない訳にはいかない。
姉上が私を捨てなかったように。
私は部屋を出ようとする彼女の手を取る。
「イオリさん？」
「いいですよ、受け入れます。だから悲しそうな顔をしないで下さい。ミアさんを傷付けたくないのでしょう？」
私の言葉にキアさんの顔は歓喜に染まる。
同時に、赤く……まるで恋する少女のように。
「ありがとう、イオリさん」
ドンと突き飛ばされ、ベッドに仰向けに倒される。
そのままキアさんは馬乗りになり、私の上で何かを振りかぶる。
光るのは針、いや……千枚通しのようなピック。
振り下ろされる狂気（凶器）に思わず払いのけそうになる。
でも、ここで拒絶すればッ……きっと彼女の歪んだ感情は行き場を失くしてしまうッ。
恐怖と反射的な行動を理性で抑え込む。
「ぐっッ!?　あく……」
左の鎖骨辺りに熱い痛みと異物。
それを受け入れた瞬間に、キアさんはゆっくりと顔を近付ける。
「ゴメンなさい、本当に……」
それからポロポロと涙を流す。
謝罪するなら最初からやめて欲しい、んですけどッ。
でも、こうしないといけない感じがした。
痛みを堪えながらも息を吐く。

「年上なのにみっともなく泣くんですね」
「だって、知らないんですもの。愛する人を傷付ける痛みと興奮なんて」
愛する人って何ですか……
家族愛的な愛情ですか？
だとしてもこんな歪んだ家族愛は知らないんですが。
「ところで……終わりですか？」
「まだ聞き足りない……イオリさんの歌をもっと聴きたいの」
告白に似た慟哭。
一度受け入れてしまったのだ。
断りたい、心底断りたいが……そんな切なそうな表情されたら何も言えない。
武偵高での生活から一変、こんな体験をするなど夢にも思いもしなかった。
私は静かに目を閉じて覚悟を決めて頷く。
それからキアさんは蠱惑的に囁く。
「ゴメンなさい。生活に支障が出ないようにしますから」
ミアさんが帰って来るまで長い夜になった。

……いつの間にか明け方。
我ながらショック死しなくてよかったとぼんやりとしながらも心から思う。
というか、途中から記憶がない。
確実に失神してた。
頭も痛い。
隣を見ればキアさんが……
……キアさん？
「いった!?」
思わず跳ね起きそうになって、鎖骨の痛みで起きれなかった。
しかし同時にぼんやりした頭が覚醒する。
こ、この人……下着でなんで私と一緒のベッドにいるんですか?!

看病なら別でミアさんとかに任せればいいでしょうにッ。
私は……別に下着姿ではないみたい、ですけど……パジャマと言うか、寝間着と言うか。
ともかくラフな姿にはなっている。
「……」
そして、様子を見に来たであろうミアさんがいつの間にか扉の傍で立っている。
心底面白くなさそうな、ゴミを見るような目で。
冷や汗が出てくる。
この姉妹に何故私は板挟みにされてるのか……
「んぅ……起きたの？　イオリさん」
何だか戦場染みてきた雰囲気の場所なのに、キアさんはのんびりと起きる。
布団から出てくるきめ細かな肌がすごい煽情的だ。
女子である私ですら生唾を飲み込む光景。
それから目の見えない彼女は手探りで私の体に指を這わせる。
思わず傷口に優しく触れられるものの、それでも痛い。
「んッ……」
「大丈夫、かしら？　一応、応急処置はミアにも手伝ってもらったのだけれど」
「その前に妹さんの視線が痛いんですが」
「え？　ミア……？」
そのままミアさんはずんずんと怒っているような足音を響かせて、
「きゃっ!?」
キアさんをお姫様抱っこでベッドから引き？がした。
「……ハァ」
それから私を見て、今日は見逃すとばかりに呆れ気味に息を吐いた。
私はようやくゆっくりと体を起こす。
すると、ベッド近くの小さなスタンド机に置かれた私の携帯が鳴る。

相手は姉上。
「はい」
『やっほ、そっちでは明け方かな？』
だけど声は快活な女性の声。
相変わらず同じ人とは思えないですね。
「ええ、まあ……」
『どうやらキアの秘密を知ったらしいね』
昨日の今日ですよ？
情報が早い。
『家族なら私はお見通しなのさ。って言うのは冗談で、お姉ちゃんから聞いてね。どう？　キアの歪んだ愛情は受け入れられそう？』
「もう受け入れましたよ。不安そうだったので」
『わお、イケメン。以織ってば王子様気質だ』
「切りますよ、姉上」
『あっと、その前に……香港には来るのは知ってる。何をするかは知ってる？』
「何も知らされていませんよ」
本当に香港に何をしに行くのか。
汚れ仕事と言うならロクでもない話なのは間違いない。
『じゃあ、現地で説明だね。久しぶりに会えるのを楽しみにしてるよ。それじゃあ』
と、それで姉上は通話を切った。
何とも、退屈しない日々ではありますね。
痛みを伴うのは勘弁ですが。